

つもりまこと
津守 眞 さん
元愛育養護学校長・お茶の水女子大名誉教授

発達遅れた子の保育に終戦後に加わり、養護学校（現特別支援学校）がほとんどなかった1955（昭和30）年に産声を上げた私立愛育養護学校（東京）の設立に尽力。日本の障がい児教育の道を開いた。

発達心理学の研究をリードしたが、50代でお茶の水女子大学の学部長を辞して愛育の校長に。知的障がいや肢体不自由のある子が通う小さな学び舎を生涯愛した。時に子どもと床に転がり、四つんばいになりながら、晩年まで子どもと対等に向き合った。その姿が多くの子の心を開き、自分を育んだ。



子どもに本を読む津守眞さん。一人ひとりに向き合い、その子に合った本を選んで読んだ＝2005年、東京都港区の愛育養護学校

同じ目線 障がい児の心育む

「何もできないように見える子が実に繊細な感性を持ち、独自の仕方では表現している。良い目を持ちさえすれば、誰にでも発見できる」。そう信じ、子どもの表情や動きを見つめ続けた。「父は記録魔でした。家に帰ると朝から晩までメモを書いていました」と三女の白井多実さん。保育の実体験に基づく膨大な記録を元に省察し、子どもの世界を理解しようと努めた。

「保育の友や後輩はいるが、僕に弟子はいない」と話し、教職員とも対等に接した。ともに15年間保育に携わった東京家政大の榎沢良彦教授は「保育後の会議では対等に発言できて、にこやかに聞いてくれた」。多くの保育者や子どもに慕われ、先月の偲ぶ会に大勢が集まった。いつもは子どもの声が響くホールホールの祭壇に、好んで吹いたハルモニカが飾られた。「津守先生の精神はいささかも変わらないうし変えてはならない」。同校の母体である恩賜財団母子愛育会の古川貞二郎会長は優しい笑顔の遺影を前に、愛育を次代に引き継ぐと誓った。（木村裕明）

2018年12月10日死去（老衰） 92歳